

St. Luke's International University Repository

いのちを輝かせる「美整容」が拓く新たな看護の役割: Rings Care® の実践から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 智祉緒 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/0002000412

いのちを輝かせる「美整容」が拓く新たな看護の役割 ——Rings Care® の実践から——

大平智社緒

I. はじめに

日本は超高齢・多死社会を迎え、医療の主眼が治療による延命から、患者を包括的に支え、個人が自分らしく生きることを支援する方向へと変化している。そのため、身体的ケアに加え、精神的、社会的、スピリチュアルなニーズに対応する看護の重要性が増している。また、病気や障害があっても QOL（生活の質）の向上を目指す革新的なアプローチが求められている。

このような状況下で、筆者は高齢者医療の現場で看護師として働いた経験から、整容を含む患者の外見に対し課題意識をもち、新たな看護ケアの可能性を追求してきた。医療・介護の現場では、身体的ケアが優先され、容姿に関する配慮は後回しにされがちである。特に「化粧」は、現代では自己表現や身だしなみとして日常生活文化となっているが、病院や施設への入所とともに、ほとんどの人が実施できなくなる。疾患や加齢、障害等により自身で化粧ができなくなった際、顔を単におしぼりで拭くだけの対応は粗雑といえるだろう。また、この化粧を含む「整容」の軽視は、社会的存在である人間にとって、心理的・社会的に深刻な影響を及ぼす可能性がある。本稿では、現代社会における化粧や整容の意義を再考し、その人らしさを引き出す化粧・整容ケア（以下、「美整容」）を通じた看護の新たな可能性を探究する。

II. 整容ケアの現状と外見への意識

高齢者や療養中の患者は、身体機能や認知機能の低下により、従来当たり前に行ってきた化粧を含む身だしなみを整える整容行動が困難になることが多い。「整容」は看護基礎教育において、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の日常生活援助技術に含まれているものの（文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2017）、具体的にどのような技術が修得できればよいかは明示されていない（服部ら, 2024）。

一方、医療・介護現場では、整容の援助は「あったほうがよいもの」という認識に留まり、生命維持に直結す

る処置やケアと比べて優先順位が低くなりがちである。また、施設側の人員配置や時間的制約により、十分な整容ケアを提供できていない現状がある。弊社では、この整容に『美』という概念を付与し、生きること自体を輝かせるためのケアのひとつとして、介護保険外の自費サービスとして提供している。

III. Rings Care® の「美整容」の取り組み

1. サービス概要

首都圏の介護施設に在住の介護が必要な高齢者を対象とし、定期訪問型の化粧・整容ケアサービスを展開している。このサービスは、看護師や介護士などの医療・介護の資格をもつ専門のセラピストがひとり一人の状態に合わせた整容行動をサポートし心と体の両面での健康の維持・増進し、最期まで自分らしく美しく生きられることを目指している。以下に本サービスの特徴を述べる。

- ・セラピストとの関係性を基盤とし本人のコンフォートを強める
- ・そばにいること、視線を合わす、肌に触れるなどケアリングを意識
- ・ICF（国際生活機能分類）に基づく個別アセスメントによる個別ケア計画の立案
- ・定期的な評価とケア内容の修正
- ・現場スタッフやケアマネジャーとの緊密な連携
- ・ご家族との連携によるケアの実施

2. ケアの具体的な内容、基本的なケアフロー

本サービスの具体的な流れは以下のとおりである。

①初回アセスメント

- ・生活歴や化粧習慣の聴取
- ・皮膚の状態確認
- ・ADL（日常生活動作）評価
- ・認知機能の評価
- ・ご本人とご家族の希望確認

②ケアプランの立案

- ・スキンケアプログラムの作成
- ・メイクプランの策定
- ・必要な道具や化粧品品の選定

- ・実施頻度の設定
- ③定期的なケアの実施
 - ・清潔ケア（洗顔、整髪、口腔・鼻腔・耳腔ケア、髭剃り等）
 - ・スキンケア（保湿・保護）
 - ・メイクセラピー
 - ・ハンド&ネイルケア
- ④評価と修正
 - ・3か月毎の効果測定
 - ・ケア内容の見直し
 - ・多職種カンファレンスでの情報共有

IV. 「美整容」の基本的役割と効果

1. 自己肯定感の向上

鏡を見て肌に触れ、身だしなみを整える行動は、単なる外見の問題ではなく、自己認識と自尊心に深くかかわっている(Patzer, 1997)。さっぱりと整った身なりは、自分自身への満足感を高め、前向きな気持ちを促進する。特に入院や施設入所により、それまでの生活環境が大きく変化した方にとって、なじみのある自分の普段の姿に近づくことは、自己アイデンティティの維持に重要な役割を果たす(上鶴, 2021)。

2. 社会的つながりの強化

外見を整えることは、自己への関心・他者への関心を向上させ、周囲とのコミュニケーションや社会的交流を促進する。実際の現場では、ケア導入後、以下のような変化が観察されている。

- ・食堂での食事回数の増加
- ・レクリエーション参加への意欲向上
- ・他の入所者との会話の増加
- ・面会時の表情の明るさ向上

3. 日常生活リズムの確立

規則的な整容は、生活リズムを整える重要な手がかりとなる。特に認知症の方にとって、朝の整容は「1日の始まり」を認識する重要な合図となり、サーカディアンリズムの維持にも寄与する。

V. メイクの多面的効果

近年では、メイクアップが高齢者や認知症の方のADL(日常生活動作)やQOL(生活の質)の向上に効果があることが報告されている(久家ら, 2015; 出羽ら, 2008)。資生堂の研究(池山, 2013)によると、化粧をする際に使う上肢の筋力は、食事時と比較して約2~3倍となり、高齢者の握力の向上にも寄与するといわれている。

また、現場経験からも、メイクをする際のわれわれセ

ラピストとの交流自体が、認知症の方の安心や心地よさにつながり、穏やかな状態を維持する効果を確認している。メイクをとおして、ご本人は自分自身の魅力を再発見し、自信を取り戻すことができる。また、セラピストとの会話は、心の交流を深め、孤独感を解消する効果も期待できる。

VI. 「美整容」実践事例

1. 【事例1：自己の回復につながったNさん】

Nさん(90代男性)は、元来社交的な性格であったが、配偶者との死別をきっかけに自室に引きこもるようになった。次第にベッド上で過ごす時間が増え、身だしなみへの関心が低下し、他者との交流も減少していった。

セラピストが週1回の定期訪問を開始し、声かけとともに洗面所への移動介助や美整容の支援を行ったところ、Nさんは徐々に鏡のなかの自分に関心を示すようになった。ブラシを手渡すと、長年の習慣であるオールバックのヘアスタイルを整え、自発的に髭剃りも行うようになった。「Nさん、凛々しくなりましたね!」という声かけに対し、満面の笑みで応えるなど、表情も豊かになっていった。

介入開始から2か月後、Nさんは自室から出て食堂での食事を再開し、他の利用者やスタッフとの交流も活発になった。

2. 【事例2：終末期における家族をつなぐケアの実践】

Mさん(70代女性、要介護5)は、5年間継続的にRings Care®のサービスを導入されていた方であった。言語的コミュニケーションは困難な状態であったが、声かけに対して目を開けて応答し、温かいタオルでの清拭時には表情で快の反応を示した。もともとは家事や育児に専念し、特に料理を得意とする等、家族思いの母親であり、常におしゃれできれいにしていたという生活歴があった。

ケアマネジャーからの紹介で開始された訪問では、まずは基本的な清潔ケアを重視し、肌や目元のケア、耳・口腔・鼻腔の清潔保持、髪や爪の手入れ、姿勢の保持など、細部にわたる支援を実施した。調子がよいときには眉を描いたり、ネイルを施したりとMさんらしい見目でいられるようケアを行なった。

病状の進行に伴い、摂食困難や喀痰吸引が必要となり、全身状態の低下がみられたが、家族の要望により週2回の訪問に増やし、継続的なケアを提供した。お顔全体や四肢の保湿、髪の手入れをすると娘さんもスタッフも思わず「わあ、お肌キレイ!」と明るい話題が広がり互いに笑顔になった。

最期の訪問時には、娘さんと共に美整容ケアを実施し、本人の愛用していた化粧品について語り合うなど、

ご家族との良好な関係性も構築された。後日、ご家族から「本人だけでなく、家族にとっても救われた時間だった。母の最期の姿に、こちらも生きる力をもらった」との感想をいただいた。

VII. 実践事例からみる「美整容」の意義

2つの事例を通じて、「美整容」の多面的な意義が明らかとなった。事例1では、美整容ケアが自己像の回復と社会的交流の再構築につながることを示された。身だしなみを整えることで自尊心が高まり、他者とのかかわりが増えていくプロセスは、美整容ケアが単なる外見の整備にとどまらず、心理社会的機能の回復にも寄与することを示唆している。

一方、事例2からは、終末期における「美整容」の新たな可能性が見いだされた。言語的コミュニケーションが困難な状況下でも、継続的な美整容ケアを通じて本人の快の反応を引き出し、その人らしさを最期まで維持することができた。また、家族との思い出づくりの機会となり、死別後のグリーフケアにもつながるなど、家族支援の視点からも重要な役割を果たすことが示された。

特に終末期においては、以下の意義が確認された。

- ①生前からの習慣を尊重した美整容ケアによる、その人らしさの維持
- ②家族が患者に寄り添い、触れ合える貴重な時間の創出
- ③愛用品や思い出を共有する機会の提供
- ④家族の心理的負担軽減とグリーフケアへの寄与
- ⑤QOD (Quality of Death) の向上への貢献

これらの実践は、生活の質を重視した看護ケアの新たなモデルとして位置づけられ、今後の高齢者・療養者支援における重要な示唆を提供している。

VIII. 今後の展望と課題

今後の課題として、まず「美整容」の有効性に関するエビデンスの蓄積が必要である。具体的な効果測定方法の確立や、継続的なケア提供による長期的な影響の検証、さらには費用対効果の分析を通じて、その意義を科学的に明らかにしていく必要がある。

次に、サービスの持続可能性を担保するため、介護保険サービスとしての位置づけを目指した制度化への取り組みが求められる。そのためには、専門的な人材育成システムの確立とケアの質の標準化が不可欠となる。さらに、医療・介護職との効果的な連携モデルの構築や、ケアマネジメントプロセスへの「美整容」組み込み、家族支援の充実など、多職種連携の強化も重要な課題である。

高齢者や療養者に対する「美整容」は、その人の尊厳やQOLを維持・向上させる重要な看護ケアのひとつとして考えられる。今後はさらなる研究と実践を重ね、その効果を検証していくとともに、病気や障害があっても美しさを追求できる環境の整備を進めていきたい。

謝辞

第29回聖路加看護学会学術集会でのシンポジストとしての発表、ミニ講座でのメイクセラピーの実演、本稿執筆の機会をいただきました。大会長の野崎真奈美先生、ならびに企画委員の先生方に心より感謝申し上げます。

また、本稿の執筆にあたり、タイトルを学術大会シンポジウム発表時のものから一部変更しました。

引用文献

- 出羽祐子, 前田富子, 丸田操代 (2008): 化粧療法を受けた認知症患者の行動変容. *日本看護学会論文集: 老年看護*, (39): 210-212.
- 服部美穂, 篠崎恵美子 (2024): 「整容」の概念分析: 看護基礎教育における看護技術「整容」の精選と標準化に向けて. *日本看護技術学会誌*, 23: 18-29.
- 池山和幸 (2013): 化粧品と高齢女性の行動変容. *オレオサイエンス*, 13 (1): 11-16.
- 上鶴重美 (2021): *NANDA-I 看護診断定義と分類 (第12版)*. 医学書院, 東京.
- 久家慶子, 木藤恒夫 (2015): 高齢女性における化粧行動. *久留米大学心理学研究*, 14: 17-24.
- 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2017): *看護学教育モデル・コア・カリキュラム: 「学生課程においてコアとなる看護学実践能力」の習得を目指した学修目標*. 35-36, https://www.mext.go.jp/content/20230718-mxt_igaku-000030966_7.pdf (2024/12/21).
- Patzer GL (1997): Improving self-esteem by improving physical attractiveness. *Journal of Esthetic and Restorative Dentistry*, 9 (1): 44-46.